

世界大規模のトレイルOが2003年に長崎県で開催された。裏方として大会を成功に導いた長崎県協会。事務局長が大会を振り返る。

その目にはトレイルOの未来がハッキリと見えているようだ。

トレイルオリエンテーリング九州大会  
in 大村 野岳湖畔  
2003年9月21日(日)

## 文明開化の長崎発

心配された台風も東にそれ、青空のもと「自然環境の中で、障がい者と健常者が同じ条件で競えるトレイルオリエンテーリング」の大会が始まり、この日一日の、参加者の喜びの表情を見届け、大成功とはいわれないが一応の合格点はいただいたかなと、甘い甘い自己採点をしながら、この1年、様々な人との出会いが脳裏を駆けめぐるとき、やっとここまでこぎつけることができたことに感慨深いものがありました。

この大会を支えてくれたすべての皆さんと障がい者、健常者を問わず参加してくれた皆さんに感謝、感謝と自分に言い聞かせながら、これまでのできごとを振り返ってみました。

## 開催への序章

私たち長崎県OL協会は、30年前より西海OL大会を開催し、今年で30回目を迎えましたが、この間の参加者は3万7千人をこえ、ローカル大会では全国的にも貴重な大会だと自負しております。

2年前の西海大会のとき、初めてトレイルOに取組むことになりましたが、何しろその年の4月に和歌山での講習会で知り得たばかりの私にとって試行錯誤もいろいろと不安だらけ大会になりました。

それでも、ポイントOLに850人、トレイルOに400人(うち障がい者150人)の参加申込みをいただきました。残念ながら大会当日大雨に見舞われ、トレイルOは中止になりました。

今にして思えば「まだまだ早い」と神様が下された天命の大雨だったという気がします。それでも、障がい者を集めるにはどうすればいいのかということについて貴重な体験をすることができました。

このときに参加申込みをいただいた障がい者の気持ちに「いつかは報いたい」との思いが今回の大会への大きな活力になりました。

## 資金の確保

大会の開催には資金対策が大きなネックであることはどこでも同じことだと思います。OLそのものが退潮期にある中で、年々難しくなってきたことも事実です。

今回は、国の障害者スポーツ助成金を前年10月に申請し、同11月に県の推薦を受けることができました。国の予算が成立する4月に正式決定の運びになりましたが、それでは準備が間に合いませんので、11月より準備に入りました。

## トレインの選択

長崎県は山坂の町です。トレイルの要件を満たすトレインは思うにまかせない中、唯一県央地区に位置する大村市の野岳湖畔が候補にあがりました。

風光明媚なうえに、周囲3.8キロのサイクリングロードは車いすでも、容易に、安全に通行できます。加えて、障がい者用トイレも4カ所(大会の時は6カ所)あり、「ここしかない」という結論に達しました。

ただこれだけでは、不十分です。大きな大会を開催するには地元の協力も不可欠の要件です。野岳湖畔を管理する大村市と折衝し、11月末には、市長とも直接面談し、大会開催の意義、規模等々について説明し、地元としての協力体制について快諾をいただき、大村市で開催することを決意しました。

後日談ですが、4月、大村市長の平成15年度施政方針に、「健常者と障がい者が同じ条件で楽しむことができるトレイルオリエンテーリング九州大会を開催します」というくだりがありました。私どもにとってこれ以上ない追い風になりました。

## 地図調査とコースの設定

このことについては、競技責任者をお願いしたトレイル研究会の高橋厚さんと重複しますので私はふれません。

ただ高橋厚さんと、岡山の伊東洋一郎さん、鳥根の櫻内保幹さんの御三人には、競技全般に多大のご協力をいただきましたこと、紙面をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

さらにトレイルO研究会の皆さん、関東、東海の地から、あれほどまでに関心を持っていただき、ご助勢いただけるとは夢にも思っていませんでした。感謝、感激とはこのことです。

## 障がい者へのアタック

大会の規模を設定するにあたり、県OL協会の過去の実績に加えて、今後のトレイルOLの普及促進の試金石として、目に見える形で成功させたいとの一念で、ハードルは高く、参加者1,000名、その中で、障がい者300名、介助者200名としました。結果的には、参加者924名、うち障がい者236名でしたが、目標として、決して不可能な数字ではなかったと今でも思っています。

参加者を分析すると、障がいの種別では、肢体障がい者110名、聴覚障がい者26名、視覚障がい者18名、知的障がい者43名、その他(内部、体躯)39名となり、

団体別では、三彩の里(授産施設)71名(うち障がい者55名)、大村市障害者連合会57名(うち障がい者54名)、A養護学校31名(うち障がい者19名)となり、その他にも盲学校、養護学校、授産施設、障害者通勤寮、学童保育所など20名以上の団体申込みが11団体ありました。

この結果は、関係機関の深いご造詣と協会、施設、養護学校等の皆さんの真摯なご理解のおかげだと感謝しております。

ひとつだけ言えることは、障がい者の施設等では、自然を楽しむ機会がないということは切実な悩みであり、トレイルOはそのことを補う最高のプログラムとしてご理解をいただくことはそう難しいことではありません。ただ理解=参加につながることも事実です。

トレイル 0 そのものが知名度不足であることが最大の原因です。ここは地道に展開する以外に方法はありませんが、今回の参加者の大半からが楽しかったとの感想をいただき、施設等の代表者からも来年も是非とのお言葉をいただきました。これは今後のトレイル 0 の展開に大きな財産になることは間違いありません。今までほぼゼロに近かった体験者が一挙に千人近くになり、次回からは体験者の言葉として伝達されるからです。

## 障害者 300 人への対応

これは最後まで確信がもてる対応ができなかったというのが正直な気持ちです。しかし、九州には大分県障害者スポーツ協議会そしてその中心的なメンバーを擁する「太陽の家」という施設があります。

ご承知の方もあろうかと思いますが、「世界初の車いす単独のマラソン大会」は 21 年前、当時の別府太陽の家の理事長であられた中村裕博士が提唱され、大分県知事のご決断により始まり、今年で 23 回目を迎えております。

今回初めて交流をもちましたが、その太陽の家のスタッフに大いに興味を持っていただき、障害者スポーツ大会の運営には、白紙の状態であった私たちに積極的にアドバイスをいただきました。完全に消化することはできませんでしたが、まがりなりにも、236 名の障害者を受け入れ、何一つ事故もなく大会が終了できたことに証明されるように、的確なご指摘の賜と感謝しております。

もう一つ、特筆すべきは救護班として、地元の大村自衛隊のご協力をいただいたことです。

救護所は、周囲 3.5km のコースに 5 カ所設置することにしました。これは 9 月という季節柄暑さ対策として、特に体温調節の問題を抱える障がい者対策と取り組みました。当初は看護婦経験者のボランティアをと思いましたが、万一の備えての自衛隊の機動力もさることながら、救護所に赤白の腕章をつけた迷彩服の救護員がいるというだけで、見た目安心の事故防止につながると考え、協力を要請しました。救護車 2 台とあわせて救護員 8 名を派遣していただきました。これも陸・海・空の 3 部隊を抱える大村市のなせることでした。

さらに、大会役員についても、専門的な知識を要する説明用スタッフを除き、ほとんどを福祉関係の大学生を配

しましたが、身近なところに介助等について知識、経験がある人を配置することにより対応を的確にしたいという思いからでした。その中心となって協力をしてくれたのが、長崎国際大学のメンバーでした。そのうち 4 名は 2 年前の構想段階からスタッフとして、積極的に取り組んでくれました。この働きがあればこそと感謝しております。

## 大きかった地元の協力

今回の大会で地元大村市のご協力も私どもの期待を上回るものでありました。先頭に立ってご理解いただいた大村市長に敬意を表しますとともに、その窓口となられた福祉保健部担当者のご努力の賜です。感謝申し上げます。

一例を挙げれば、参加者の目標を 1,000 名と設定し、大村市との打合わせのなかで、県 OL 協会として、県外はもとより、大村市外から 700 名の参加者を確保するので、地元大村市として、300 名(うち障がい者 100 名)を確保してほしい旨を要請し、お互いの努力目標を定めました。

結果には、大村市内からの参加者が 300 名をこえ、障害者も 115 名になりました。それでも、全体の目標を達成できなかったのは、私の思惑がはずれたからにすぎません。

参加者の確保だけでなく、予算をもたう会場の整備にも多大のご出費をいただきました。

その他、ボランティアの確保等々枚挙のいとまはありませんが、長崎県 OL 協会 30 年の歴史のなかで、これほどまでに、行政に、地元にお世話になった大会はなかったといっても過言ではありません。

## トレイルの夢は果てしなく

この大会は、ご協力いただいたすべての皆様のおかげをもちまして、多大の成果をあげることができました。反面、多くの反省材料を残したことも事実であります。今回のことを教訓として、できうことなら、来年も大会を開催したいという思いがあります。

大村市長も閉会式の挨拶のなかで、「来年も、再来年も、この地で大会を開催したい」と述べられました。ありがたいことです。一番の問題は資金対策ですが、何とか努力をして大会開催へのハードルをクリアしていく所存です。

私のひとりよがりですが、トレイル 0 は、オリエンテーリングの入門として

最高のプログラムだと思います。

なぜなら、一番簡単な点状特徴物(岩、目立つ樹、記念碑、墓・・・)の東西南北の問題でも、コンパスを使わなければ答えは出ません。面状特徴物(畑、植え込み、・・・)でも最低正置をする必要があります。それに地形の特徴物(こぶ、沢、尾根・・・)では、地形読みが求められます。

30 年間、オリエンテーリングに関わった者として、地図とコンパスを頼りに、未知の野山を駆けめぐるスポーツ、それがオリエンテーリングだとかわりたい一念があります。

最近ややもすれば、初心者の方でも、コンパスは使わなくても、自然に正置をしていけばポストへたどりつくコースが見られます。

初心者こそ、未知の野山を駆けめぐることはできなくても、しっかりとコンパスを使い、地図を見、地形を読むテクニックをつけさせたい。そのためには、トレイル 0 がオリエンテーリングの入門編だと思います。それに加えて、身体にハンディを持つ人も同じ条件で競うことができるなら言うことはありません。

今回の大会を通じて、障がい者のオリエンテーリング参加への道筋をたてると同時に問題点も露出されたことにより、長崎県 OL 協会としての一つの使命は果たすことができたと思っています。

これからの夢は、九州の西の玄関・長崎と東の玄関・大分と手を携えて、九州全体にトレイル 0 の輪を広げたい。できうことなら、2005 年の愛知の世界大会日本代表の一角に九州の障がい者を派遣したいということです。夢のつづきは際限なく、広がります。

(仲尾勝利)